

創造の源泉は愛する人々 —ピカソ 死と再生のゲルニカ—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

反ファシズムの人民戦線政府とフランコ将軍が率いる反乱軍のあいだでスペイン内戦が1936年に勃発する。翌年、フランコを支持するナチス・ドイツのコンドル軍団はバスク地方にある小都市ゲルニカに史上初の無差別爆撃を行い、一般市民を中心に多数の死傷者を出した。

当時パリに住んでいたパブロ・ピカソ（1881—1973）は新聞報道によってゲルニカの悲劇を知る。爆弾の嵐に襲われる人々の悪夢のような光景を何度も思い描き、パリ万国博覧会に出展する壁画のテーマをゲルニカにしようと決心した。

母国スペインを脅かす非情な惨禍にピカソの怒り、嘆き、悲しみは頂点に達していた。「芸術は飾りではない。敵に立ち向かうための武器なのだ」と宣言し、魂を揺り動かす創作活動を開始する。

青の時代からキュビズムへ

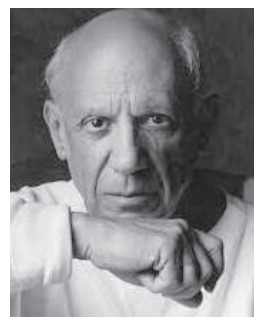
ピカソはスペインの南部アンダルシア地方のマラガで生まれた。工芸学校の美術教師だった父の影響で幼い頃から絵画に興味を抱いた。

父の転勤で一家はバルセロナに移り住む。16歳のときに描いた作品「科学と慈愛」がマドリードで開かれた国立美術展で入選する。本格的に画家になろうとマドリードの王立サン・フェルナンド美術アカデミーに入学した。

しかし授業内容は退屈で新たな発見を求めていたピカソは深く失望する。ひとりでブラド美術

館に通い、ベラスケスなど名画の模写に集中した。

王立アカデミーを中退し、バルセロナに戻ったピカソは初の個展を開いて評判を呼ぶ。意気揚々とフランスのパリをはじめ訪れ、華やかで耽美的で異様な熱気を帯びた芸術の都に魅せられる。



パブロ・ピカソ

だが浮かれた気分は長つづきしなかった。19歳になったピカソは親友の突然の自殺に衝撃を受け、のちに「青の時代」と呼ばれる暗い色調の作品を描くようになる。屈折した心情の象徴として社会から見放された最下層の人々をモチーフにした。

憂鬱な日々は何度もパリを訪れているうちに一変する。詩人のマックス・ジャコブと出会って意気投合し、彼が洗濯船と名づけたモンマルトルのアパートに部屋を借りて住みはじめた。恋人もできて画風は明るい色調による「薔薇色の時代」を迎える。この頃からアフリカの彫刻の圧倒的な存在感に強く惹かれ、後年キュビズムとして一世を風靡する独創的な作風を確立していく。

キュビズムの名称はキューブ＝立方体由来している。ルネッサンス以来の単一の視点による平面的描写ではなく複数の視点による立体的描写をめざそうとした。その先駆けとしてピカソは1907年『アビニヨンの娘たち』を制作する。極度

にデフォルメされた娘たちの姿はきわめて不評でアンリ・マティスらの画家仲間からも酷評された。のちにピカソの相棒としてキュビズムの立役者となるジョルジュ・ブラックも当初は批判的だった。それでもピカソは一向に怯まず、わが道を行く。

モノクロームのキャンバス

のちにギネスブックに掲載されるほど多作家のピカソは猛烈な勢いで作品を量産していった。「明日に延ばしてもいいのは、やり残して死んでもかまわないことだけだ」と生き急ぐように創作活動に打ち込んだ。数だけではなく手掛ける分野も油絵、素描、版画、挿絵、彫刻、陶芸と多岐にわたっている。1910年代からジャン・コクトーの前衛演劇やバレエの舞台美術を引き受け、1920年代は政治と芸術の革命を唱えるシュルレアリスム(超現実主義)に関心を抱き創始者のアンドレ・ブルトンらと親交を深めていく。

祖国スペインではボルボン王政が崩壊し、1936年に反戦・反ファシズムを掲げる人民戦線政府が誕生した。軍部は強く反発し、フランコが率いる反乱軍と人民戦線政府は内戦に突入する。

人民戦線政府を支持するピカソは1937年1月に詩集『フランコの夢と嘘』を上梓し、独裁者を痛烈に風刺した。すると人民戦線政府からパリのスペイン大使館を通じてパリ万博のスペイン館に展示する壁画の制作を依頼された。

1937年4月26日、フランコに加勢するドイツ空軍のコンドル軍団がバスク文化の中心地であるゲルニカへの無差別爆撃を行い、小さな街は一瞬にして炎の地獄と化した。成人男性は人民戦線の兵士として転戦しており、主に女性と子供たちが犠牲になった。

かつてない悲報に打ちのめされたピカソは壁画のテーマをゲルニカと決めて習作を描き始めた。そして「スペイン内戦はスペイン人民と自由に対して反動勢力が仕掛けた戦争である。私はゲルニカと名づける作品においてスペインを苦痛と死のなかに沈めてしまったファシズムに対する嫌悪をはっきりと表明する」と異例の声明を発表する。

構図がほぼ固まるとピカソはアトリエにこもって縦349cm×横777cmの巨大なキャンバスに向

かいあった。制作のプロセスは写真家でピカソの愛人でもあるドラ・マールが克明に撮影している。モノクロームの画面、泣き叫ぶ女、倒れた兵士、屍になった子供、いなくなつた馬、茫然とする牡牛。渾身の大作は世界中に波紋を広げていく。

支配を拒否して返還を

スペイン内戦は3年間つづき、人民戦線に国際義勇軍も駆けつけたものの、フランコに敗北する。反ファシズムの立場から内戦を取材したアメリカの作家ヘミングウェイは『誰がために鐘は鳴る』を刊行し、世界的なベストセラーとなった。フランコの勝利に勢いづいたナチス・ドイツのヒトラーやイタリアのムッソリーニは侵略政策をさらに強化し、第2次世界大戦が勃発する。

パリは1940年にナチス・ドイツに占領され、親独派のヴィシー政権が成立する。ピカソは作品の公開を禁止され、資源不足を口実にブロンズ塑像の制作も阻止された。だが地下抵抗組織であるレジスタンスが秘かに材料を提供し、隠れて創作活動をつづけていた。ナチス・ドイツが劣勢になって撤退し、パリが解放された1944年、ピカソはフランス共産党に入党する。

晩年を迎えても創作意欲は衰えず「やっと子供のような絵が描けるようになった。ここまで来るのにずいぶん時間がかかった」と語り、91歳で激動の生涯に幕を下ろす。私生活では2度結婚し、3人の女性と4人の子供をもうけた。平和のシンボルである鳩が大好きでフランソワーズ・ジローとのあいだに生まれた娘にスペイン語で鳩を意味するパロマとなづけた。「私の創造の源泉は、私が愛する人々である」と公言していた。

第2次世界大戦後、『ゲルニカ』は世界各国で巡回展示され、ピカソは収益金をスペイン内戦の復興のために寄付した。とはいえ『ゲルニカ』をフランコが支配するスペインに戻すことは一貫して拒否した。『ゲルニカ』はニューヨーク近代美術館に保管され、誕生から約40年後の1981年、民主化を果たしたスペインにようやく返還された。スペインの再生を願っていたピカソは自分の手を離れてから二度と『ゲルニカ』と再会することはなかった。